

第32回正論大賞に決まった木村汎氏と、第17回正論新風賞の井上和彦氏が喜びの言葉を語った。また木村氏には第27回正論大賞受賞者の拓殖大学学事顧問、渡辺利夫氏から、井上氏にはニュースキャスターの辛坊治郎氏から、それぞれ「お祝いの言葉」が贈られた。(1面参照)

大賞

北海道大学名誉教授 木村汎氏



光栄至極に存じます。
私の方こそ、「産経新聞」、雑誌「正論」、正論懇話会での講演、フジテレビの番組などを通じて、「一般読者や視聴者の方々のコミュニケーションが可能になり、育てて戴きました。この機に深謝の気持ちを表明します。」
一例として、産経新聞の「正論」欄執筆の過程を通じて、私が学ぶことができた文章の構成や表現法を挙げたい。と存じます。
「正論」同人になるまでの私は、専ら一部の研究者相手に学術論文を書いていた。ところが、「産経新聞」の読者向けとなると、基本は変わらなはいえ、その表現法に若干の工夫を凝らす必要があることを悟った。
マスメディアの世界では、連日カレントな事件、それに関する報道が次から次へと洪水のように押し寄せる。そ

育てていただき深謝の気持ち

のような活字が氾濫する中で己の文章に注目し、且つ最後まで読み通していただくのは、至難の業である。例えばタイトル、そして小見出しの付け方が大きく作用する。「最近のロシアを巡る国際情勢」といった漠然かつ悠長な題の付け方では、多忙な現代人は澳もひっかけてくれない。現に、私のタイトルが原案どおり採用されたことは皆無である。常に「正論」担当者による絶妙のネーミングによって置き換えられた。
文章の書き出しも、同様に重要。私は、司馬遼太郎氏の所謂「自転車漕ぎ換法」を念頭におくことにした。書き出しは短く、だが滑らかに始める。次は、やや長い文章へと加速してゆく。もとより、いったん食いついた読者を途中で手放すのは、愚の骨頂。こう教えた米国のミリオンセラー作家ステイブン・キング、故ヒッチコック監督による、次から次への「巻き込み手法」も参考になる。
現在、「正論」コラムは2千字という厳しい字数制限を敷いている。この字数では、学術論文とは異なり、先行研究や己の仮説を婉々と説明する余裕などあるはずはない。そうすれば、忽ち読者諸賢兄弟から「結局、お前は何か言いたいのだ？」とお叱りを頂戴すること必定。そのために、専門論文ですら漫然と書きはじめの怠惰な私が、「正論」用には手許のメモ用紙に3つばかりの要点を記してから原稿用紙に向かう習慣をいつしか身につけることになった。
身の程知らずとの批判をつける覚悟で敢えていうなら、私はこれまで研究者と評論家との二足のわらじを履く決意でやってきた。前者はともかく、今回後者に関してお墨付きを戴いたようにも感じ、大変嬉しかった。

第32回 正論大賞

〈きむら・ひろし〉昭和11年、京城(現ソウル)市生まれ、京都大学法学部卒、同大大学院修士課程修了。指導教員は猪木正道氏。米コロンビア大学Ph.D。45年から北海道大学法学部助教授、52年に同大学スラブ研究センター教授、平成3年に同大名誉教授、国際日本文化研究センター教授に。著作に「ソ連とロシア人」「ソ連式交渉術」「総決算 ゴルバチョフの外交」「ボリス・エリツィン」「遠い隣国 ロシアと日本」「日露国境交渉史」「プーチンのエネルギー戦略」「現代ロシア国家論」「メドベージェフvsプーチン」「プーチン 人間的考察」「プーチン 内政的考察」など。実父は民法学者の木村常信京大名誉教授、実姉は推理小説作家の山村美紗氏で、女優の山村紅葉さんは姪にあたる。昭和52年10月から産経新聞「正論」欄執筆メンバー。平成14年に第14回アジア・太平洋賞大賞受賞、28年春に瑞宝中綬章受勲。

第27回大賞受賞者「お祝いの言葉」



何という凄く執筆意欲を漲らせる研究者だろうか。老境にいたり立つづくに「プーチン」と題する二冊の大著、一つを「人間的考察」、二つを「内政的考察」として上梓、次いで三冊目を「外交的考察」、四冊目を「終

拓殖大学学事顧問 渡辺利夫氏

焉的考察」として構想中だという。人は誰しも、自分の専門とする分野以外のテーマについては、この人の見解にしたがっていけば判断にまらず間違いないであろうという「わが内なるオピニオンリーダー」を隠し持っているものだが、門外漢の私がロシアのことを考えるときに必ず思い浮かべるのは木村汎氏の著作である。
ロシアという複雑を極める強大な生命体を腑分けして精細に観察、これらを再構成してその存在の真実を世に証すというのが木村氏の叙述のスタイルである。ひたすら手間のかかる仕事を飽くことなくつづけて氏のプーチンロビーが着々と進められている。KGB

(ソ連秘密警察)の一退役大佐にすぎなかつたプーチンが位をきわめ、G7の指導者を振り回すほどの力量を身に付けるまでなつたのはなぜなのか。プーチンという生身の、しかも現職の大統領の姿を伝記作家的アプローチをもって浮かび上がらせることに木村氏は満身の力をこめる。
木村氏は、膨大なロシア研究の果てに、この国の政治において人間の演じる役割の決定的な重要性、その分析の不可避性に行き着いたということなのであろう。
木村氏の筆致はどこまでも平明である。「遠い隣国」で卓絶した評価を手にした碩学だが、プーチンを描く文章から立ちのぼる生氣は青年のものである。

「青年の生氣」立ちのぼる碩学の文章